

ばよい。ここではホッブズとロック、ルソーとの差違は鮮明となる。ホッブズはためらうことなく「自分のために生きよ」と語るであろう。オークショットのみにみれば、これもまた権力と理性への哲学的懐疑の表現なのである。

『リヴァイアサン』を解釈する場合、ホッブズの機械論哲学をベースにして（人工国家論として）解釈するのが普通の方法であるが、シュトラウスやオークショットの研究はホッブズを懐疑の形而上学者として解釈する。もちろんこの場合には現代合理主義と現代民主主義・自由主

義への批判的意識が背景にあるわけだ。一見アカデミックとみえるホッブズ解釈をめぐる論争も、そういう視点からみれば現代的な問いとなる。

ハイエクはマンデヴィルやヒューム、スミスを評価するがホッブズは好みではないようだ。シュトラウスやオークショットはホッブズにひかれる。このあたりの対照もおもしろい。その意味で、保守派哲学の深層にある心理をかいま見る上でも本書は参考となろう。

福岡伸一著

『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書、2007年5月発行、740円＋税）

————— 工藤 孝史

私たちが見るもの、聞くもののすべては、私たちを含む世界に起こっている物理現象であること、またこの物理世界は、原子や分子といった粒子と空間から成り立っており、それを知覚しているわれわれ人間の身体と言えどもそうした物理現象のひとつであること——こうした原子論的なものの見方は今や常識のようになっている反面、はたして「私たち一人一人のからだは原子の集合体である」という実感となると、なかなかそうした実感がもてない。そしてその「集合体」である私は、なぜこの物理世界の「色」や「音」をさまざまに区別しているのか？さらには、感覚器官をとおして獲得するそうした知覚を土台に、さまざまに行動しまた思考しながら生きているのか？そうした疑問に答えるとなると、原子から私たちの生活実態までの距離は遠のくばかりだ。

理由はいくつかあるだろう。まず第一に私のような自然科学とは関係のない人間は、普通は分子はおろか、それが合わさってできたときれる人間の細胞すら見たことがない。分子の運動から自分の生活をイメージできないのである。生き物の細胞をこの目で見たのは中学校の時に

ネギの薄皮を顕微鏡で見たのが最初で最後である。有機化学の教授をしていた伯父の研究室を見学に行って、遠心分離器だの高分子の模型などを見せられたのも、遙か昔、幼い頃の記憶である。地球が自転していると「教わって」もそれが実感できないのに似ている。

人間の生の営みを分子レベルで実感できないもうひとつの理由は、おそらく分子レベルの「運動」と、普段私たちが経験している身体「運動」とのあいだにとつともないギャップがあるように思えるからだろう。鍋のお湯が沸騰してポコポコというような運動と、私が今こうしてキーボードをたたいている運動では、少なくとも感覚的には大きな違いがある。

何れにせよ、私たちの身体は小さな物質で構成され、それが複雑に（この形容詞はこの際何の役にも立たないような気もするが）関係して、生命が維持され、その生命は幾多の行動をし、その行動の中には「思考」もまた含まれる。私はこの膨大な連鎖について考えることが嫌いではない。しかし一体何処からどう手を付けたら良いのか……これは私がまえから気になっている課題のひとつである。本書『生物と無生物の

あいだ』は、そんな気がかりにおおきな光明を与えてくれた。私の貧しい経験の範囲内ではあるけれど、分子レベルで生活実態を捕らえるという難問に、ここまですんなり答えてくれた本はあまりない。

DNA やタンパク質のふるまいについて書かれた本を、これまでも何冊か読んだ覚えがあるが、たいていはただ「仕組み」を説明したものだ。た。「なるほどそうか」とわかる部分がある。しかし、それ(例えばDNAの情報によって自己複製を行うタンパク質の姿)が、私たちの生活実態とどんな風に結びついているのか、という問題になると、厳密な科学の論述が私には突然おとぎ話に聞こえてしまうのが常であった。

本書は私たち人間を含め生き物たちが「分子を食べる」ことによって、その分子をどう処理しているのか、というまことに日常的なレベルで、アミノ酸やタンパク質の「ふるまい」を説明してくれている。それと同時に、DNAの二重らせん構造の発見という一大イベントの背景にあった研究の歴史と、その研究を支えていた思想に焦点を当てることによって、著者自身が行き着いた「生き物の定義」までの道筋を丁寧に追っている。著者は「生命体とはミクロなパーツからなる精巧なプラモデル、すなわち分子機械にすぎない」といった分子生物学の生命観に抗って、生命をあくまでも時間軸のなかで分解と生成を繰り返す「動的な平衡状態」ないしは「流れ」そのものとして定義しようとしているの

だが、この流れの主人公である原子や分子のふるまいが私のような素人にもよくわかるように説明されていて、思わず嬉しくなった。

その昔デモクリトスは、知性と感覚を論争させて次のように言わせた。知性いわく「表面上は色がある、表面上は苦味がある、しかし実のところ原子と空虚あるのみ」と。これに応酬して感覚いわく「おろかな知性よ、われらからおまえの論拠を借りてなお、われらに打ち勝とうと望むのか。お前の勝利は、お前の敗北」と。これは、本書『生物と無生物のあいだ』にも登場する物理学者エルヴィン・シュレティンガーが、観察に基づいて打ち立てられた理論には対象となることからの感覚的性質を説明する力がないという、認識における一種のジレンマについて述べた際に引用した言葉だ(中村量空訳『精神と物質』、工作舎、1987年、pp.153-154)。

確かに私たちは、主観的だとされる感覚と、客観的だとされる知識のジレンマからなかなか抜け出すことができない。しかし、もしこの宇宙のありとあらゆる原子のふるまいが、たまたま「私」という身体として形成され秩序を作り、かつこの形成されたと思われている秩序＝身体は、じつは分解と生成をくり返しながたえず分子レベルで交換されている、つまり「私」であった身体は一時として同じところにとどまてはいない、ということになれば「私」の感覚もまた、分子の運動の特異な秩序と考えることができるのかも知れない。

宮島 喬／若松邦弘／小森宏美・編

『地域ヨーロッパ——多層化・再編・再生——』(人文書院、2007年11月発行、321ページ、2200円+税)

●—————石坂 昭雄

現在、社会組織化の絶対的基盤であった国民国家の地位が大きく揺らいでおり、それに対して一方で市場や国際制度などの超国家的空間、他方でこれまで国民国家のなかのサブユニット

とされてきた《地域》の役割や意義が大きく増大している。こうした《国際統合》と他方での《地域化》の研究のうえで絶好の素材を提供してくれるのが、いまや中東欧にも及ぶ27カ国にま